

第6回

湯崎知事と 「ひろしまの未来を語る」 (三原市)

と き 令和3年4月14日(水)

ところ 三原駅前スペース SATELLACE

目次頁

開会	2
知事ビジョン説明	2
参加者①	5
参加者②	6
参加者③	8
参加者④	9
参加者⑤	9
参加者⑥	10
市長コメント	13
フリートーク	15
閉会	17

広島県

開 会

司 会： 皆様、お待たせいたしました。

ただ今から「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」意見交換会「広島未来を語る in 三原」を開催いたします。

はじめに本日御参加の皆様を御紹介いたします。

湯崎知事の右手側から、梶谷剛さんです、西上忠臣さんです、桂木悦史さんです、田中ちひろさんです、泉大貴さんです、本田あやさんです。

また、本日は三原市長、岡田吉弘様、広島県議会議員、伊藤英治様、平本英司様も御出席です。

続きまして、本日意見交換いただくテーマであります「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」の説明、その後意見交換に入りますが、ここからは湯崎知事に進行役をお願いしたいと思います。

湯崎知事どうぞよろしく願いいたします。

意見交換

湯崎知事： 皆様、こんばんは。

今日は皆さん、それぞれ年度始めで、いろいろと何かとお忙しいところだと思いますが、こうやって御出席をいただきまして、本当にありがとうございます。

広島県では、10年後の目指す姿、そしてその実現に向けた方向性を示した新しい総合計画を今年度からスタートしたのです。

これは去年10月に策定したのですが「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」といっております。

このビジョンによる新たな広島県づくり、これを皆さんと一緒に進めていきたいと考えております。

そのために皆様の率直な御意見をお伺いして、意見交換をさせていただくことで、今後の施策の展開につなげていきたいと考え、この会を開催させていただいております。

県内23市町、実は去年、策定直後から始めて、コロナが非常に拡大してきたので、一時中断して本当に終わるのかと危惧しており、なかなか大変なスケジュールで今進めております。

三原も多分オリジナルより遅れてしまったのですが、本当に参加いただいてありがとうございます。

それで皆様から御意見お伺いする前に、私からビジョンのポイントについて御説明させていただきます。

こちらを御覧いただければと思うのですが、まず策定の背景がございます。

こういうふうな今の時代、人口減少とか少子高齢化、10年前にもビジョン作った時にも、大きな課題ですといっていました。そのときにはまだ、そこまで減り始めていませんでした。

しかし、今や毎年1万人ぐらい広島県の人口減っています。

つまり、現実化しているということです。

それから、グローバル社会というのも新しい展開を見せていって、これも10年前のビジョンでも指摘をしていたことなのですが、ますますもってこの参画するプレイヤーが増えていきますし、日本の競争力というのも世界の中でも大きく変化しつつあります。

それからデジタル技術がやってきました。これは避けられない、嫌でもやってくるという状況です。

コロナを含めて、この格差社会というのが浮き彫りになりつつある、世界でもそういったことが非常に大きな問題になっています。

災害もたくさん発生しました、三原も大きな災害を経験したわけです。

それからもちろんコロナ、こういった先行きが非常に不透明なそんな状況があるのではないかと思います。

そこで、広島のビジョンとしましては、まず30年後にどんな広島県になりたいかということ分野ごとに作りまして、その30年後にこうなりたいなというところから、それではそこに至るためには、10年後にはどうなっていないかということをお考えまして、それでは今からその10年後に向かうためには何が必要だろ

うということでビジョンを作っています。

30年後というのは正直いって誰も分かりません。

30年後を予想できる人は、ほとんどいないのですが、だから、あまり具体的にはならないのですが、少し抽象的かもしれない。

ただそれを10年後に引き戻してくると、少し具体的に書くことができるので、できるだけ具体的に書きながらそこに至る道を考える。

そういうことをやって今回のビジョンを作っております。

基本理念といたしましては、将来にわたって「広島に生まれ・育ち・住み・働いて良かった」と心から思える広島県の実現なのですが、この目指す姿というのが、県民一人一人が「安心」の土台と「誇り」により、夢や希望に「挑戦」していますというふうにおいております。

そして仕事も暮らしも。里もまちも。それぞれの欲張りなライフスタイルの実現というのをサブタイトルで付けているのですが、これはそれぞれ御説明してまいります。

その中でポイントがいくつかあるのですが、今申し上げたような「安心」の土台と「誇り」の高まりにより、夢や希望に「挑戦」していくということです。欲張りなライフスタイルとありますが、これはこの前のビジョンですね、昨年度まで、ですから今年の3月まで実行しておりました旧ビジョン、この中でも欲張りなライフスタイルといっているのです。

これはどういうことかという、仕事も暮らしもどちらも諦めることなく追求できる、自分の希望がかなう、そういった姿を目指していこうということで欲張りといっているのです。

というのは、よくワークライフバランスといいますが、ワークライフバランスの議論がスタートしていた中で、ちょっと仕事をし過ぎではないか、仕事の手を緩めてもっと暮らしに振り向けようみたいな、いつてみたら100あったら100は変わらないのですが、40、60を60、40にしましょうみたいな、そんな感じでイメージされていることが多かったと思います。

そうではなくて、今60、40だったら、60、60で120にしましょうと。

それが広島県の考え方で、それをどう実現するのか、それが実現すれば仕事も暮らしも、どちらも欲張りにできるではないかということで、欲張りといっているのですが、それは引き続き、引き継いでいこうということです。

そのために、まず「安心」を作る、「誇り」を高める、そして夢や希望に「挑戦」する、そういうことをいっています。

「適散・適集社会」のフロントランナー、これも後で説明が出てきますが、広島県の特徴として自然と都市が近いということがあります。

こういった特徴を生かしながら、今コロナで密になり過ぎるのは少し問題だよなということが強く認識されてきたと思いますが、その中で一定の集積も必要でしょう。ですから、適切な分散と適切な集積、あるいは集中、これを実現する。それが新たな日本社会、あるいは世界での社会の在り方ではないかと思っているのですが、そのフロントランナーとなっていこうということ。

それから、全ての施策を貫く3つの視点というのがありまして、これはデジタルトランスフォーメーションの推進、それから、ひろしまブランドの強化をしていきたいと思います。そして、人材育成ということで、これがいろいろな施策があるわけですが、それを横に貫く3つの視点として置いていこうというものであります。

それでもう少し詳しく御説明しますと、まず「安心」の土台と「誇り」の高まりというところですが、今まさにこのコロナで、多くの人が不安で胸がいっぱいという感じになっているわけです。

それは感染するかもしれないという不安もありますが、自分の仕事がどうなるのだろうか、商売がすごく落ち込んだとか、いろいろなそういった不安もあります。

もちろんそれだけではなくて、これから先、年金とかどうなるのだろうかとか、あるいは、それこそ昔、昭和の時代は、みんなどんどん毎年給料が良くなっていましたが、今はそんな時代ではなくて、自分の将来がどうなるのだろうかという漠然とした不安とか、そういったことがある。

まずは、そういった不安をできるだけ軽減をしていこうと、それが土台になるだろうと考えておまして、それでは不安を安心に変えるというのはどういうことかという、これまでのやり方を続けるのではなくて、新しいやり方、イノベーションを起こして、

そういった不安を解消していきましょうとか、あるいはセーフティーネットを構築していきましょうということ。

そして、もちろん人材育成、しっかりと生涯学習をし続けられるような環境もそうですが、そういう教育ですよ、そういう教育というのは、生涯学び続けることができる力をまず学校教育で身につけるといってそういうことを通じて安心につなげていこうということですよ。

それから、「誇り」の高まりというのは、広島県いろいろと強みとか素晴らしいものがありますよ。

瀬戸内海それから中国山地、これはどちらも非常に豊かな食をもたらしています。

三原もそうですよ。

三原は本当に欲張りな感じで海もあれば山もあって、どちらも、とても恵まれているというのが三原ではないかと思えます。

あるいは産業も、三原はもともと城下町であり、産業城下町という歴史がありますが、都市と自然が近いとか、そういった広島の強みこれを磨いていく、それによって我々自身が地域に誇りを持つことができる。

それがエネルギーになって、次の挑戦に向かうことができるのではないかということ、で、「誇り」を高めていこうとっております。

そしてそれをベースに挑戦をしていこうと、皆さん一人一人、いろいろな希望だとか夢だとか、そういったものがあるのではないかと思えます。

もともとは今の安心とか誇りというところで、そういうことが持てるということ、をまず作らなければいけないのですが、夢や希望を持った場合に、それが実際にそこに向かって一歩踏み出していくことができる。

それを後押ししていこうと考えておまして、それが先ほど申し上げたような欲張りなライフスタイル、地域での役割だとかもちろん家庭でのライフ、そして仕事。こういったいろいろな役割というのが人それぞれあるわけですが、その中で自分が果たしていきたい自分の姿、実現したい自分の姿それができるようにやっていこうということでもあります。

そして、「里もまちも。」ということについていうと、これはいろいろなことがあるのですが、広島市とか福山市とか中核になる都市もあります。

そういった魅力ある都市を更に発展させていく、豊かな中山間地域というのがありますから、そこもしっかりと持続可能にしていく。

そして、まさに三原のような利便性が高い、いわゆるコンパクトシティ、これは三原の場合は中山間地域との連携もありますが、非常に都市機能もあって便利で、暮らしやすさや住みやすさ、そういうところを作っていこうと。

それが「里もまちも。」というところでもあります。

そういう意味でも、欲張りになっていきたいと思っております。

それから、「適散・適集社会」というのは、先ほども少し触れましたが、コロナの前はどんどん密になっていくと、どんどん建物も密にして、その中にいっぱい人を押し込んでみんなが仕事をするみたいな、そんなところが都市化というところでありましたが、むしろそれはいろいろな問題があるのではないかというのは、今回のコロナですごく強く意識されるようになりましたよね。

何で私たちこんなに苦労して、毎日満員電車で、すし詰めになって、往復3時間もかけて、何でこんなことやっているのだらうと、都会の人は思い始めたわけですよ。

そういう中で東京一極集中が問題ではないか、あるいはデジタル遅れているのではないかと意識され始めたわけですが、次の段階として、今いった密ではなくて、もっと開放的で快適な環境というのが人間らしくていいのではないかと。

それから、そんなに密にならなくても、今デジタル技術を使えば、かなり空間的な制約だとか、時間的な制約を乗り越えられるのではないかと。

一方で、やはり一定密になるのも必要ですよ。

何気ない雑談から、いろいろなことが生まれてくることはありますが、これは顔を合わせたりとか、大人になったら一杯やりながらとか、そういったことも重要だろうと、それが全くできないと、それはそれでいろいろな発展につながらない。

ですから、適切な一定の集積・集合・集中というものもある。

それも作っていかないといけないということで、適切な分散と適切な集中、これをうまく組み合わせた社会、これが新しいポストコロナで求められる、最先端の社会の在り

方だろうと思っております、実はそれが広島をよく見ると、まさにその姿を持っているのではないかと。

非常に開放的な中山間地域もあれば、一定の機能が集中した都市もあるし、都市も、もちろんそんなに何時間もかけて通勤するような環境ではない。

何時間もかけて通勤していたら本当に毎日、三原と広島を往復していますみたいなね、実際そういう方もいらっしゃるのですが、そういう感じなので非常にコンパクトだし、まさに適散・適集、物理的にはですね。

あるいは社会的にもそういう状況にあるのではないかと。

それは強みになるだろうということ、そこでの新たな社会像を目指していこうと、それがフロントランナーになっていこうということでもあります。

それから、次に、それぞれいろいろな施策を進めていくわけですが、3つの視点というのを先ほど申しあげました。

1つはデジタルですね DX、デジタルトランスフォーメーションの推進、それからブランドの強化、そして人材育成ということですが、デジタルトランスフォーメーション、あるいはデジタル技術というのは否が応でもやってくる。

本当に馬車が自動車に置き換わったように、抵抗してもやってくるのです。

それでは、それをどううまく取り込んでいくか、どう自分たちの力にするか、デジタルを供給される側ということだけではなくて、我々も供給する側、そしてそれをうまく使う側そこになっていこうと思っております。

それから先ほどの誇りにも非常に関係してくるのですが、広島ブランドの強化をしていくと、広島ブランドを強化すると何がいいのというと、やはり、皆、広島に住みたいと思ってくれたり、訪問したいと思ってくれたり、あるいは広島のことを信用して買ってくれたり、みんなの憧れの的になるとかそういうことですね。

決して、このひろしまブランドというのは、何か個別の商品にひろしまブランドと付けたがるのですが、そういうことでは全くなくて、広島そのものが住みやすいですねとか、あるいはすごくエネルギーにあふれていますねとか、そういうふうなイメージを持ってもらう。

そういったことをいろいろな施策を通じて進めていきたいと思っております。

そして、人材育成、これは全ての活動の源泉というか土台というかそういうものでありますので、何をやるにしても人の力で行っていくわけなので、生涯にわたって自分の能力、それから可能性を最大限に高めていくことができる。

それぞれのいろいろな力が、それぞれの人にありますから、それを最大限に高めていくことができるようにしていこうと、3つの視点を掲げております。

施策領域としては、17ほどあるのですが、それぞれお互いに連関をしているのかなと思っております、それぞれの分野でいろいろな目標を作っております。

例えば、産業面でいうと基幹産業や成長産業など、県の取組による付加価値創出額、5,000 億円プラスしていきましょう。これは、5,000 億円ってどういうものかということ、大体、広島県のいわゆる総生産、GDP といわれるもの、これが 11 兆円ぐらいあるのです。

それに 5,000 億の施策によって積み増していこうということであるとか、あるいはこの右側にありますが、大学進学時に、今すごく転出が超過になっていますが、これをゼロにしていこうと、こういった目標をそれぞれ作っています。

具体的に分野を見ていくと、例えば子供・子育てという分野では、10年後の目指す姿として、全ての家庭を妊娠期から子育て期まで切れ目なく見守り、支援するネウボラの拠点在全市町に設置されています。

子育て家庭に関わる全ての医療機関、保育所、幼稚園、地域子育て支援拠点、学校などと連携して、子供たちを多面的・継続的に見守ります。

そして必要な支援が届けられている、こういったような姿、これをおいてそれに関わるさまざまな指標だとか、あるいはそこに向けてどういったことをやるのかという取組の方向性を分野ごと、あるいは更に細かい部分で定めているということでもあります。

教育だと、今学びの変革というのをやっていますが、学びの変革がしっかりと定着しているだとか、あるいは観光であれば「ひろしまブランド」とか「瀬戸内ブランド」という認知がしっかりと高まっている。

もう一回、ゆっくりと来たいな広島に、そういうふうにも思ってもらえるような観光地になっていこうと。

具体的な指標としては、例えば観光消費額が令和12年には8,000億円、令和元年度で4,400億円ぐらいなのですが、それを8,000億円ぐらいに拡大していくようにしていきますという目標です。

こういったことは分野ごとに定めています。

最後は、県内のどこに住んでいても県民の皆様一人一人がと書いてあるのですが、ここの大事なところは、これはビジョンを実現するのは決して行政ではないのです。

県庁ではないのです。

広島県を構成しているのは県庁ではなくて、県民の皆さんです。

県民一人一人、あるいは事業者一つ一つが広島県を構成していきまして、その皆さんがどういうふうに行動していくのか、どういうことをやっていくのか、あるいはどういうふうに変っていくのかということ、広島県が変わっていくので、県庁と行政というのは、それを後押しする、それをお支えする、あるいは挑戦できるような環境を作る、そういったことです。

県民の皆様一人一人が、まさに夢や希望に挑戦できる、そういう状況を作って、それで実際に挑戦していただく。

それによって一人一人の歩みは小さいかもしれませんが、これが皆合わさると非常に大きな歩みになっていくということで、一緒に県民の皆様と行政と進めていくと、そういうものだと考えております。

私からの説明は以上でございます。

これから意見交換に入らせていただきたいと思います。

はじめに参加者の皆様から、お一人ずつ5分程度で御意見、御提案を発言いただければと思います。

御発言が一巡したら、残りの時間は、全員で意見交換をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

発言の順番はあらかじめお願いしていると思いますので、よろしくお願いします。

お座りになったままでお話しただければと思います。

それでははじめに、梶谷さんからお願いできますでしょうか。

参加者①

梶 谷： 三原市久井町から来ました梶谷です。よろしくお願いします。

久井町は典型的な中山間地域の過疎の町です。

今回私は、中山間地域における子供・子育てについて発表させていただきます。

中山間地域の子育てで重要なもの、湯崎知事、何か思いつくものがありますでしょうか。

お金もちろん必要なのですが、物、これがないと困るなという物ですね。

中山間地域の生活で。

湯崎知事： 交通手段。

梶 谷： そうです。正解です。

車と運転免許。交通手段ですね。食料品や日用品の購入はもちろん、子供の習い事の送迎、子供が友だちの家に遊びに行くのも送迎がいりますし、学校に通うのもスクールバスですし、高校に進学すると親が送迎するかバス通学になります。

子供の移動手段の確保が重要な問題になります。

若者が少ない中山間地域の社会では、高齢者の役割もとても重要です。

60代は、まだまだ現役バリバリですし、70代、80代でも元気に仕事をして趣味を楽しみ、地域行事にも積極的に参加されています。

そういう元気な高齢者と子供たちが上手にマッチングできないものかと考えています。

その方法として、まず高齢者のサークル活動を小さな集落単位ではなく、市町の中心地の1つの施設に集約します。

理由は集落に点在している小さな単位のサークルが人数不足のために活動が困難になりつつある現状があります。

もちろん反発もあるかもしれませんが、昔ながらの地区割にこだわらず、広い範囲の人が一堂に集まって盛大に活動していただきます。

どうやってその場所に行くのかという問題は、デマンド交通の充実で解消できます。

更にそのデマンド交通を利用して、子供たちもその場所を利用できるようにします。

子供たちも高齢者と同じ施設で遊んだり、勉強したりします。

高齢者にはサークル活動、お茶でもしながら子供を見守ってもらったり、一緒に遊ん

だり、自由に過ごしていただく。

近所にあるおじいちゃん、おばあちゃんの家のような雰囲気を想像していただければと思います。

家で一人で過ごすよりも、人の気配のある場所で過ごす安心感もありますし、刺激もあり、喜びになるのではないかと思います。

更なるその場所が妊婦さんや、乳幼児のママさんの情報交換の場所になったり、中高生が試験勉強をするような場所にもなってほしいです。

高齢者の経験や知識を中高生に伝えたり、勉強な得意な中高生が小学生の宿題を見たり、人と人との化学反応で楽しい交流の場になることを期待します。

その場所として、私は久井町に住んでいますので、久井町なら保健福祉センターが適所ではないかと思います。

先日、岡田市長が「未来トーク」で来館されたあの施設です。

デイサービスもあり、久井支所もあり、隣には図書館もあって目の前に広い芝生の土地もあります。

デマンド交通の充実さえしていただければ、すぐにでも実現可能な上、乳幼児から高齢者まで幅広く効果が期待できます。

とりあえず人が集まる場所を作る。

そこに行くためのデマンド交通を充実させる。

あとは、集まった人たちに好きに過ごしてもらう。

ぜひ実現に向けた第一歩をお願いしたいです。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

交通というお話がありましたが、その中に、実はいろいろなテーマを折り込んでお話しいただいたのではないかと思います。

集約していくとか、そこに交通が必要だということですが。

あと皆が、若い人、子供とマッチングしてうまくお互い支え合うようにできたらというようなことではないかと思いますが、本当にありがとうございました。

それでは続きまして、西上さんにお問い合わせできますでしょうか。

参加者②

西上： よろしく申し上げます。西上といいます。

私は、引きこもりや発達障害といった思春期に悩みを持つ方々の活動場所を営んでいます。

また、障害者の方々の働く場を就労支援事業で支援したり、一般企業に紹介したり、そういった活動を行っています。

そういった支援をしながら感じることは、障害を持っている方は早期に分かるようになってきたし、専門的な支援も地域の中で随分行われてきているのではないかと感じています。

しかし、小さい頃には、そこまで目立った障害は分からなかったのですが、中学、高校、大学、就職と社会生活が広がって、社会参加をしなくてはいけないといった時期になって、それまでの環境と違う環境になってくると、適応しづらい方が多くなってきています。

引きこもりだとか荒れてしまうとか、そういったような方もいらっしゃるのですが、多くの方は、それまではいい子だったのに、なかなか働けないとか学校に行けないとか、友だちができづらいとか、家族にも周りにも相談できない、そういったことで悩んでいる方が多くて、多くの方は孤立したり社会から疎外感を感じている方もいらっしゃいます。

これは統計的な話なのですが、15才から40才ぐらいの方で1.6パーセントの方が引きこもりであると言われていたり、80才の親と60才の子供が皆さん引きこもってしまうと、社会から孤立しているというのは、どこにもよく聞かれることかなと思っています。

そういった方々の相談を受けているのですが、小さい頃には福祉的なサービスがあったりとか、学校の先生方も大変ご尽力していただいて、いろいろな形でつながりがあるのですが、大人になってからはサービスというのは非常に少ないのが現状かなと思っています。

また、それを支える大人の側も、知識も経験も若干なければ専門家もなかなかいない状況の中で活動しているところもたくさんあります。

小さい頃には周りとは何ら変わらないという形で生活して、大人になってから何だか人と違うとなつてはじめて分かることが多くて、そのときに、さてどなたに相談したものかとか、どういう具合に自分は生きていったらいいかなと感じることが多いので、そういったことをできるだけ感じないような場づくりを三原の駅前で行ってきました。

三原の駅前で行ってきたというのは、少しこだわりもあって、先ほども交通の話もあったのですが、車から遠く離れて行くところよりも、交通が集まっている場所のほうが、そういった方々が来やすいのではないかと。

点と点で来るよりは線につながって来ていただくとか、駅前の中で活動することで、また、そういった方々が自信を持って社会参加に向かっていくのではないかなというところで、駅前の場所を選んで活動しています。

ただ、そういった方々が、伴走型、伴走しながら支援をするということは、なかなか出来づらいのが現状です。

福祉、障害を持っているわけでもないし、かといって働くことが難しい中でどうやって生計を立てて、この活動も維持しながら、また相談する方のことを考えながらしていくというのは、すごく難しいと感じています。

そのためには、多様な学習の方法とか、多様な働くスタイルとか、そういったことをたくさん地域の中で感じるようなことが必要ではないかと思っています。

先ほど知事が言われた、デジタル化とかそういったことは一つ、実はこういった方々に対しては、こもりびとという言葉もありますが、引きこもりではなくて、こもって生活ができるという意味では、何となく市民権を得たようなそんな感覚になっている方もいらっしゃるの事実です。

やはり、情報化社会の中で、例えば、情報についていかなかったら、全てから孤立してしまうということも、実際あるのも事実です。

また、こういった形で散らばってデジタルで学んでいたり、経験を積むということも大切なのですが、社会に出るときはもっといろいろな経験をする必要もあると思っています。

それは、先ほど集約とか、集まって事を起こすということかなと思うのですが、やはりデジタル化だけではなくて、こうやって集まって何かをして多様な大人たちの中で自分の役割とか、自分の生きがいとか活動を見つけていって、自信を深めていって、人と人の間で生きていくということをもっとしていく場づくりが必要ではないかなと思っています。

特に、働く場というのは、とても重要だと思っています。

これまで紹介した方々や障害を持った方は、あまり大都市圏に行つて外で働くというよりは、三原であれば三原で生きてそのまま大人になって、三原で住み続けて働くということが必要な方が多いです。

ですが、例えばこの三原の地域で仕事なくなるということは、この方々の生活もどんどんしづらくなっていってしまうということもあるかなと、より直結しているのではないかなと思っています。

できるだけ多様な仕事を知って、その中で経験を積んで、自分にあつた仕事の仕方とか、自分の能力に気づくことができればいいなと感じております。

そのためには、学校で行っているインターンシップとか、そういったこともあるのですが、できるだけ職場実習をしたり、職場の体験をしたり、実際にそういった人たちと触れ合うという時間を作っていければいいなと思っています。

以上です、ありがとうございました。

湯崎知事： 西上さん、ありがとうございました。

これもまた後で、いろいろとお話させていただければと思いますが、今なかなか人と人との関わりを薄くしようという方向で社会がきている中で、もう一回、それを再構築していくことも必要なことだと思いますし、そういう中でお互い支え合う、それから多様な在り方を知って、自分にあつた選択をしていく、そういうことが必要だというお話だったかと思っています。

ありがとうございました。

それでは引き続いてでございますが、次は桂木さんお願いできますでしょうか。

参加者③

桂 木： 失礼します。県立広島大学人間福祉学科の桂木と申します。

普段は、大学では福祉の勉強をしていますので、今回は、福祉とか医療介護に関することに、大学生の立場から個人的にこういうものがあつたらと思うことを話させていただきます。

早速なのですが、医療介護の対象者、主に高齢者になるかなと思うのですが、先ほどからも話へ何度も上がっているように、デジタル技術をどんどん進めていくべきかと思っていて、高齢者支援においても、情報通信技術、ICTO、もっと活用していくことが必要ではないかと考えています。

私がそういうふうを考えるようになったのは、やはり新型コロナウイルスの影響があります。

というのも、コロナ拡大防止のために、事業所が高齢者宅を訪問するようなサービスであつたり、逆に高齢者の方が事業所を訪問するようなサービスが利用休止するということもありました。

こういうことがあつたことで、地域で生活する高齢者が在宅でもあらゆるサービスを受けられるようにというのを、全国的に仕組みづくりをしていると思うのですが、コロナ禍でそれができなくなると、現状の課題であつたり、限界というものが見られたのではないかなと私は考えています。

また、人との関わりが制限されている中で、地域の人との交流がなくなっているということもあつたと思います。

これは、特に独居の高齢者の方々の生活の質を下げているのではないかと考えます。

こういったことを防ぐためにも、自宅に居ても支援を受けたり、家族や地域の人と関わるができる仕組みを作っていければいいのではないかと思います。

具体的な取組として、実際に他の県や市で取り組まれているようなことは、コミュニケーションロボットというものを一定期間無料で高齢者に貸与したりしています。

このコミュニケーションロボットというものは、家族とのコミュニケーションを図ったり、家族ではなく、AIと話すことで孤独感とか暇な感じを軽減したり、健康維持または向上を図る機能だったり、見守り機能というのを果たしています。

特に、AIスピーカー型のものであれば、話しかけるだけで高齢者でも操作ができるので、高齢者の操作負担というのも減るかなと思います。

それから、医療分野でいえば、これから5Gがどんどん整備されていきますので、高画質なテレビ電話、テレビ通話等で、オンライン診療が進められるのではないかなということも話されています。

こういった取組を県や市で行っていったり、もしくは民間で取り組めるように整備していくこと、それから民間の取組の補助とか、優良な事例というものを取りまとめていくようなことがあればいいのではないかなと思います。

これらのICT支援というのは、コロナ禍だけの話ではなくて、現状、介護分野では、人材不足というのがありますので、今後の人材不足の解消であつたり、これまでも身体的障害等で、自宅から出ることが難しい人もいらっしゃると思うので、そういった方への支援にもつながるのではないかなとも考えています。

高齢者は情報機器の取り扱いが難しいということもあると思うので、機器利用の補助であつたり、勉強会みたいなものも必要になってくるかなと思います。

10年後、30年後となっていくと、これから高齢者の中でも情報機器を使えるという人が増えていくかなと思うので、長い目で見ると、これから取り組んでいくことで、ビジョンの中にもあつた安心づくりや、住みやすいというひろしまブランドの強化につながるのではないかなと思います。

以上です、ありがとうございました。

湯 崎 知 事： ありがとうございます。

医療介護とデジタル技術を組み合わせて、障害のある人あるいは高齢者の暮らしを改善していこうと、一つの桂木さんの夢のようなものも、含まれていたかもしれませんが、ありがとうございました。

それでは引き続いて、田中さんお願いできますでしょうか。

参加者④

田 中： よろしくお願ひします。

私も同じく、県立広島大学人間福祉学科4年の田中ちひろです。

私は時間が許す限り2点の意見をお話できたらいいなと思います。

1つ目が、先ほどもおっしゃられたのですが、デジタル技術に関してなのですが、このコロナ禍によって私たちもオンライン授業という対応になって、それでもデジタルの良さがとても分かって、効率がいいこととか便利なことがとても分かりました。

ですが実際にデジタル技術が推進いく社会で、とても生きにくいなと思う、苦勞するなと思う人もやはり出てくるのではないかと思います。

それが実際の身近な者でいうと、祖母や母が少しデジタルを使いこなせなくて、祖母は特に残りの人生の中でデジタルを活用していくことが必要ないし、使っていく気がないとはっきり言っています。

このような者たちにデジタル技術を推進していく社会を生きることというのは、やはり不安もあるし、うまく対応できないことがあるのではないかと思います。

実際社会の流れというのは、これからどんどんデジタルの力が強くなっていくので、祖母とかも含めてデジタルを使いこなせないという方たちに、フォローが必要なのではないかなと思いました。

このフォローというのが、私の中では具体的なことが思いつくことができないのですが、新聞とかを読んでいたらデジタルの講習などを行っている区域もあるので、まず勉強会とかデジタルを活用していくことで、どんな便利なことがあるのかということ、ちゃんと言葉で伝えていくことも必要なのではないかなと思いました。

2つ目が防災・減災のところですが、目指す姿の実現に向けた取組の方向として、防災教育の推進を上げられていたのですが、私も小学校、中学校、高校、大学生どの学年でも防災教育は行ってきたので、とても身近なものではないかなと思って、ここから考えました。

今まで防災教育を受けてきたのですが、この教育を受けたからといって、必ずしも全ての方が影響を受けるわけではない思いがあります。

私が大学のときに受けた防災教育で、講義の中で一度地域の中のハザードマップを見てみてとおっしゃられて、後日見てみると自分の地域が、土砂災害警戒区域に入っていたので、それを講義の先生から見てみてと言われて、始めて調べて知ることができたので、とても怖いなどは思ったのですが、やはり土砂災害警戒区域に入っていることで、どのくらい自分に危険性があるのかとか、どのくらい砂などが押し寄せてくるのかが、まだ分からないので、やはり危機感というのは感じにくいというのが実際のところではあります。

そういう思いがある中で、指標にも書いてある避難の準備行動ができていない人の割合が、現状値の13.6パーセントから10年後の目標値が100パーセントと書いてあるのを見て、とても大きいなと感じまして、この100パーセントに込められた意味を聞かせていただけたらうれしいなと思いました。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

デジタル技術が新たなギャップを生んではいけないというお話と、災害についてはやはり具体的に市民の皆さん、県民の皆さんがイメージして実際に避難できるようにしないでいけないというご指摘だったかと思います。ありがとうございます。

それでは続きまして泉さんお願いできますでしょうか。

参加者⑤

泉 泉： よろしくお願ひします。

僕はDXと商店街についてという切り口から、お話をさせていただけたらと思っています。

少し僕の話になるのですが、約4、5年前に中国から三原にUターンしてきてまして、まちづくりを大学時代やっていたのもあって、帰って来たときに商店街とか地域の中で何かできないかなというところで、活動をスタートしました。

そんな中で商店街から手伝ってほしいという声がかかって、最初は外の人間だったのですが関わっていくうちに、僕も今商店街大変な時期で何とかできないかなという形で、

そこから商栄会連合会というところの会長をさせていただく形になっています。

手元に別紙でA4の横刷りのものがあるかと思うのですが、こちらがそもそも三原商栄会連合会って何なのと言われる方が多いので作ったのですが、全部で商店街とか商栄会と呼ばれる商工団体がこの連合会には13ほど入っています。

それで全部で330会員いるのですが、特にJR三原駅中心に青とかオレンジの丸で囲っているところが、そういった地域に分布していて、多くがこの駅周辺、中心市街地周辺にある商店街の連合団体です。

裏面を見ていただいて、どんなことにしているかになるのですが、いろいろなことをやっているのですが、一番は駅周辺にある半ドン夜市と呼ばれる、本当にこれを見ると今だと密すぎてちょっと緊張感がわくのですが、今年はできるかどうかなのですが、非常に密で元気のあるお祭りをしていまして、コロナ禍では三原市に支援いただいて、三原おまもりチケットというものを、前売りチケットが一時期、そのコロナが出たばかりのときにいろいろあったと思うのですが、三原も商店街中心に三原市に支援いただきながらさせていただいていました。

今こういう商店街がどういった現状かといいますと、多分いろいろな地域の商店街の多くと似ていまして、すごく高齢化していて人材が不足していて、新しいことにチャレンジするのが、なかなか大変だけれどもという状態になっています。

そういうのも期待して、ひょっとしたら僕を会長に押しつけていたのもあるのかもしれないのですが、三原市どうなっているのかとなったときに、中心市街地と呼ばれているところが本当にコンパクトシティとして、三原市の一つのアイコンとなるような場所だと思っています。

福祉施設もあったり、商業施設があったり市役所もあって、図書館もあって大型ショッピングセンターもあって、いろいろな機能が駅周辺に集約されているので、そこは盛り上げていくというところは大事なのではないかなと思うのですが、その多くをカバーする商店街が、なかなか高齢化とか動けないという状態があるので、役割は本当はたくさんあるはずなのだけれども、なかなか頑張れる体制に気持ちはあっても、できないのではないかなという状態があって、ここはなんとかできないかなというのを考えています。

そこでDXというところが、一つ意識改革というか商店との意識改革のきっかけにできないかと思っています。

理由は僕自信もデジタルが好きなのもあるのですが、最近クラブハウスをよく聞くのですが、アプリで中高生中心にいろいろな人が人気でやっているのですが、地方創生をテーマに話すことが結構あるのです。

その中で僕が商店街の悩みとかいろいろな人に言うときに、広島ってDXいいよねとよく言われて、頑張っている、僕ら関東圏では全然補助ないし、チャレンジできるところあまりないのだけれども、広島県はかなりそういったところに補助もあるし、いろいろな取組があるからいいと思うのだけれどもと言われたことがあって、そういうのは外の声を聞かないと、DXの取組、広島はあるのだけれども、他県もいっぱいやっていると勝手に思っているところがあって、であれば広島の強みというのを生かして、商店街の悩みを何とか解決できないかなというところを思っています。

具体的にどう解決するのかとなったときはかなり大変な話でして、今広島県でDXという取組が、取組としてあったりするのですが、僕ら連合会は登録とかしたりするのですが、どううまく入って行って、やっていけばいいのかというところを、すごく悩んでいるところがあるので、一歩踏み込んで伴走してもらえれば、ここをちょっとチャレンジとして、コロナが過ぎたら多分いいかとなる可能性もあるので、これは何とかできないかなという感じで今は活動しています。以上です。

湯崎知事：ありがとうございます。

デジタルを使って商店街を変えていこう。

まさにDXのご紹介もいただきましたが、新しい時代にうまくデジタルを活用できればというお話でございました。ありがとうございます。

それでは続いて、本田さんお待たせしました。よろしくお願ひします。

参加者⑥

本田：本田あやと申します。

今日はこのような貴重な場に参加させていただきありがとうございます。

ちょっと緊張しているので、うまくしゃべれるか分からないのでメモを見ながらお話をさせていただけたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

まず少し自己紹介をさせていただきたいと思います。

私は去年の2月に東京から地元の三原にUターンして帰ってきました。

高校卒業してから約16年間三原を離れていたのですが、広島どころか三原のこともまだよく分かっていないような状態なので、移住者の目線から、いろいろとお話をさせていただけたらと思っています。

仕事はフリーランスでグラフィックデザインと、イラストのお仕事をさせてもらっています。

東京のお仕事をそのまま続けながら、今、地元のお仕事が少しずつ増えてきている状態です。

広島にUターンをしたきっかけをお話させていただくと、30才少し過ぎたくらいから、東京ってどこに行っても人が多いし、常に働いていないといけないみたいな、せわしなさがあって、それに疲れてきたのもありまして、最初は海の近くに暮らせたらなど、漠然とした思いがあったのですよ。

それで最初ちょっと関東離れるのが惜しかったので、関東圏の海の近い場所で引っ越しを考えたのですが、私が好きな海というのは、瀬戸内海の穏やかな海だなと気づいて、それなら大好きな広島に帰って来ようかなと思ったのが移住したきっかけになります。

最初、広島県内で結構幅広く移住先を探していたので、東京のふるさと回帰センターとか、県庁が主催している移住セミナーとかイベントとかよく参加させてもらっていました。

広島県は移住希望地ランキングでは、2019年だと2位に入っているくらい、結構移住地として人気がすごくあるところで、知事もおっしゃっているように、本当に海と山が近くにあって程よく都会な部分もあるので、私が求めている、ちょうど関東から帰って来るのに、田舎過ぎるとちょっと慣れないかなというのもあったので、ちょうどいいところかなと思いました。

中でもこの三原市は陸・海・空の交通の便が全てそろっている。

本当にその利便性に関しては広島県でも1番ではないかなと思っています。

それ以外にも住環境が便利、本当に駅前がいろいろと密集してそろっていたりとか、医療も充実していますし、結構こっちに帰って来てフリーランスでやっていると、いろいろとチャレンジしようと思ったりするのですが、そういうことを応援してくれる住民の方が結構多いなと感じて、本当にちょうどいい町だなと思っているので、ここの三原で頑張ってみようかなと思っています今に至る状態です。

私自信はコロナの影響でリモートワークとか、オンライン会議が当たり前になった今の状態が、本当にタイミング的にすごく助かりました。

コロナのおかげで移住を考える人が増えたと思うのですが、そういう世の中の流れは町に人を移すチャンスなのではないかなと思うので、三原市自体には先ほどいった利便性とかをもっと押し出して、移住促進とかにつなげられるような活動を私もしていきたいなと思っています。

これは東京に居たころからずっと感じていたのですが、三原市は認知度が本当に低いのです。

東京の知人に聞いてみるとほとんど知らなくて、三原ってどここといわれたら、大体尾道の横というのが決り文句のような感じだったので。

それでも広島に観光に来たことがある人は、大体の人が来ているのですが、それで飛行機で来た人は三原には一応来ているわけですが。けれども、三原を知ってもらえないというのはすごく悲しいことだなと、私はずっと思っていました。

それでまず自分ができる何か、県内外の人に三原のことを知ってもらえるようなものはないかなというので、先ほど手元にお配りしていただいた、みはらモノトコというこういうデザインのことから三原を知ってもらいつつ、お土産になるようなブランドを作らせてもらいました。

説明させていただくと、三原の名所とか名物を自分のイラストで起こして、そういうものを文房具とか日用品にして、お土産屋さんで販売したり、ネットショップで販売させてもらっています。

私はデザインは人を動かすところで大事なツールだと思っているので、三原市にはク

リエイティブなこととかが発信しやすかったり、挑戦しやすい環境を作ってもらえたらうれしく思っています。

以上になります、どうもありがとうございました。

湯崎知事： ありがとうございます。

コロナも含めて移住というのは、今大きく着目されている。

それをどういうふうに進めるのかというお話でございました。ありがとうございます。

皆さんそれぞれ本当に素晴らしい御意見をいただきまして、ありがとうございます。

今日は市長が非常にデジタルを推進されていることもあってか、デジタルに絡むお話もたくさんありましたが、梶谷さんは交通のお話とかもいただいたのですが、1つはやはり集約するというので、コンパクトシティですよ。

これはコンパクトな町というのは、他の方も何人かおっしゃっていると思うのですが、それを更に利便性の高いものにしていくためにはどうしたらいいとか、それをつなぐ交通これも非常に重要なのだと思っています。

ビジョンの中でも、そういうふうはこのまちづくりの中であって、コンパクトに機能を集めたまちづくりということと、特にこの中山間地域を中心として、公共交通機関をどうするのか、MaaSなどの活用も含めてやっていこうと、今我々、取組を進めているところですし、デマンド交通も、もちろんその一つになるかと思っております。

西上さんは引きこもりの方、障害のある方、いろいろな事情というか持っている方との共生社会の話かなと思うのですが、先ほども少し触れましたが、今の社会はどんどん人と人とを、どちらかというお互い関わりがないように、昔はお互いが関わりあってやっていたようなのです。

子育てもそうなのですが、子育て地域のみんなで、おじちゃん、おばちゃんたちが面倒みてくれていたのが、そういうのがなくなって、知らない人からとか、近所の人でも声かけられると、うるさいから止めてくれというようになってしまって、そういう中でお互いがつながらなければいけないって、非常に難しいですよ。

それをしっかりとやっていこうと地域共生社会ですね。

その中でいろいろな事情を抱えた人とか、いろいろな違う能力を持ったような人、そういう皆さんがみんな力で合わせて、支え合って生きていくためにはどうしたらいいのか、ということをお我々もしっかりと取り組まないといけないと思っております。

この地域共生社会というところで、そういうテーマを扱うというふうに考えています。

それから一人一人の力というのは本当にいろいろなので、ある力、例えば勉強が弱くてもすごく人の気持ちが分かるとか、いわゆる発達障害みたいなものがあったとしても、すごい集中力があって、逆に我々などではとてもできないようなことをとやり遂げちゃうとか、芸術家なんかそういう方多いですが、そういうそれぞれの持つ力をどう伸ばしていくか、これは教育の部分で、我々が目指そうとしているところですが、そういうことを取り組んでいきたいと思っています。

桂木さんは、デジタルを活用して医療、介護どう進めていくかというお話でしたが、今県では医療DXというのを進めようということで、今年から特に健康福祉局という部署になるのですが、その中で特にチームを作ってやっていこうというふうに考えています。

それから孤独ということをお話されました。

本当にコミュニケーションロボットとか含めて有効だと思いますが、やはりリアルに合うということも、すごく大事なことだと思うので、そういう孤独の問題というか孤独にならない。

これもまた地域共生社会というお話につながってくることだと思っていますが、新しい技術も活用しながら県庁としても、みんなを支え合うことができるように進めたいと思っています。

田中さんもデジタルのお話をいただきました。

ただデジタルで取り残されちゃう人がいると駄目ですよ。

誰も取り残さないというのを、我々も県議会で、デジタルを進めるに当たって言われていることですが、デジタルは物事を解決するためにあるので、デジタルによって、新しい問題を生んでいくようでは駄目ですよ。

そういう観点で我々も進めていきたいと思っております。

それから防災についても、ご質問があったかと思うのですが、災害の準備ができてい

るというのを 100 パーセントにしようというのをですね、これは今、広島県で災害死ゼロというのを目指そうと言っていて、これはみんなで減災、総ぐるみ運動というのをやっているのです。

まず災害を知るところから、災害を知るといのはまず自分がどんな危険なところにいるのかとか、そういったことを知る。

そして災害が起きたら、どうなるのかということを知ること。

それから知った上で、それを行動できるようにしようということ、行動するというのがいろいろあるわけで、事前の行動が準備をするですし、それから実際に災害が起きたときに避難するという、これも行動なのですが、そういうことができるようにしようと言っていて、災害死ゼロを目指すために、やはり一人一人が、しっかりと準備などもできていないといけないということで、100 パーセントという目標を立てているところ

です。災害死ゼロというのも本当になかなか難しく、平成 30 年の 7 月豪雨でも、三原でもお亡くなりになられた方いらっしゃいまして、本当に残念でした。

そういうことを繰り返さないように、技術もテクノロジーも使いながら、地域共生社会というはお互いに地域で支え合うという力も使いながら、そしてもちろん一人一人の準備これもしっかりして、災害死ゼロを目指したいと思っていますところ

です。そして泉さんですね、このコンパクトシティですよ。

中心市街地、三原はコンパクトで、五藤市長時代から私はお話を聞いていて、いろいろな福祉関係の施設だとか子育て関係だとか、もちろん市役所とか公共の機能をこの周辺に集めていくというのを、意識的にやられてきたというふうには理解しています。

ここも新しい図書館と、ここと隣に商店街、繁華街があるという素晴らしいロケーションだと思います。

こういうところがあれば、少し離れたところからみんなでここにやってくる、いろいろな機能を使うともできますし、そこでまた交流も生まれることになるのではないかと思います。

これもまたデジタルを使いながら商店街を活性化していく、よりリアルとデジタルとを組み合わせることで進めることができたらいのではないかと思います。

DX についても既に御承知だったので、DX というのは、まさに今のような商店街をデジタルで活性化するためにどうしたらいいのだろうという問題意識、課題。

解決方法は分からなくてもいいから、とにかく問題意識を出してくださいよと、それに対してどのようなことができるか考えましょうというのがプロジェクトであって、今もう既にだいぶ進んでいるのですが、今後もそういった取組を進めていきたいと思っています。

そして本田さんには、この移住についてお話をいただきましたが、やはりコンパクトさに、すごく魅力を感じておられるということで、これもビジョンの中で利便性、まさに三原のような町がコンパクトにまとまって、いろいろな利便性の高い機能を中心市街地に持ちながら、それと各地域を結んで、みんなが交流できて便利さを享受できるような、そういうまちづくりにしたい。

それをまた他地域に対してアピールをして知ってもらって、三原の海も美しいです。

たこはおいしいし、佐木島のレモンもおいしいし、本当にそういうふうを知ってもらったら、来てくれる方もたくさんいらっしゃるのではないかなと思いますので、我々も引き続きこの移住、定住ということについては力を入れて進めたいと思います。

というようなところですが、岡田市長これまでのところで何かコメントがございませうか。

岡田市長： 本日は湯崎知事をはじめ広島県の職員の皆様、三原までお越しいただきまして、ありがとうございます。

また参加者の皆様も、コロナ禍ではありますが御参加をいただき、貴重な意見をいただき本当にありがとうございます。

今回のこのひろしまビジョン、10 年後というところでビジョンを作っているわけなのですが、よくバックキャストの手法と、フォアキャストの手法と両方言われることがありますが、この両方を組み合わせた形で、ちょっと先の未来、近い未来ですね、それを描いた非常に完成度の高いビジョンだと感銘を受けております。

このビジョンが特にコロナ禍におけるいろいろな価値観の変化だったり、いろいろな意識の変化、これを踏まえたものになっているのが非常に心強く思っております。

また湯崎知事から冒頭御説明ありましたが、恵まれている三原というようにもおっしゃっていただきました。

私本当にそういうふうに思います。

いろいろなコロナ禍で価値観、意識が変化する中で、三原は本当にトップランナーになれる宝がたくさんあると思っておりまして、そのフロントランナー、トップランナーとして走りきって、三原市民の皆さんが、それが誇りになっていくというふうにしていきたい。

そのために広島県の皆さんと一緒に連携をとりながら、頑張っていきたいとそんなふうに思っております。

個々について私からも少しコメントさせてもよろしいですか。

梶谷さんからは、中山間地域におけるいろいろな交通手段等々についてのコメントがございました。

交流の場が必要だということをおっしゃっていただきましたが、私結構、久井町が大好きで、先日も夢山冒険あそび場ですか、裏山で子供たちが自然の中で遊ぶという場があって、そこに私もおじゃましたのですが、そこには子供たちだけではなくて、いろいろな生活の知恵とか、いろいろな自然のことについての知識の豊富な大人、高齢者の方も多かったですが、そういった方々が集っている場でした。

そういったところで、いろいろな交流が生まれているというのが、中山間地域の1つの強みだと思いますし、こういったものを引き続き伸ばすような形にしていって、そのコミュニティができることによって、デマンド交通といったものも充実化してくるといって、そんな流れにつなげていけたらいいなと感じたしだいでございます。

西上さんからは、地域共生社会というところで、障害を持たれていたり、引きこもりの方であっても、それぞれの個に合わせた形での、いろいろなバックアップをしていくことが非常に大事だという話でした。

これは本当にそう思います。

それぞれ置かれている状況が違いますので、この人にはこういう対応でよかったけれども、こっちの人ではそれでは駄目だったと、本当にたくさん出てくるので、これは行政だけでなく、本当にあらゆる専門家がいい連携を取りつつ、情報共有を図りつつ、それぞれに合わせた対応していく必要があると思いますので、これも私、三原だったらできていると思っています。

三原ぐらいコンパクトな町で、いろいろな業界分野の関係者のつながりが強い三原であれば、そういった支援とか、いろいろなサポートもできると確信をしておりますので、また引き続きいろいろとご指導いただきたいと思います。

桂木さんからはデジタルと、そういうテクノロジーの活用といったところで、まさにDXが暮らしの改善につながるということが1番だと思います。

自宅にいながらいろいろなことができるとか、そういったことができる時代になってきていて、例えば最近高齢者の運転免許証の返納のようなことが社会問題として言われるのですが、そういつてある意味、中山間地域の高齢者は移動に困っている方が多いのですが、いろいろなテクノロジーを活用することによって、自宅に居ながらも買い物ができたり、あるいは自宅に居ながらも診療が受けられる、医療が受けられるということが、これも近い将来必ず実現されるものだと思いますので、そういったことについても、一つずつ実証等々も含めて、進めていく必要があるのかなと思います。

田中さんからも、またデジタルの話がございましたし、防災教育の話がございました。

桂木さんも田中さんも、おっしゃっていたことですが、高齢者の方がなかなかデジタル苦手だよねということがありました。

そういった中で高齢者の方が、そういったスマートフォンの使い方を身に着けられるような講習があるといいのではないかという提言をいただきましたが、実は私も市長に就任する前に、高齢者を対象とするスマホ教室の講師をやっていたりしてですね、非常に意欲的でやる気のある市民の方が参加いただいて、教えるるとどんどん吸収して、あっという間にLINEを使いこなしていたということもございました。

そういった場が増えてくると、もっとデジタルを使いこなす人が増えていくでしょうし、使いこなしていけばいくほどそれが楽しくなって、どんどん社会とつながって、あるいはその楽しさを周りの人に伝えていくことができないかなと、聞きながら思っております。

また防災教育のところは、三原も3年前に大きな災害が起きまして、その災害が起き

たときに、三原市民の皆さんがどういう避難行動を取ったのかということ、県立広島大学の先生方ですね、共同で調査研究をしました。

どういう行動を取ったかということ調査して、それを分析してということをやったのですが、その研究成果を踏まえて、三原ならではの避難行動促進というものを作ろうということで、今年度、三原スタイルというものを確立してやっていこうと思っています。

これは行政だけではなくて、いろいろな民間企業ですね、商業施設とか、人が集うようなところともいろいろと連携を取るような形で、避難を促していくということもやっていこうと思っていますので、またそういったことにもぜひ御参加いただけたらと思います。

泉さんは、DXと商店街というところで、おまもりチケット私も使わせてもらいましたが、おもしろいですよね。おまもりチケットが実はスマートフォンでも買えたりということもあって、まさにそういうことの方が先がけだったのだらうと思いますし、いろいろな取組がこれからできると思いますので、泉さん自信もデジタルに強いので、ぜひとも商店街を巻き込んだ旗振り役になってもらえたらうれしいなと思います。

本田さんは、移住してきていただいて、海が好きだということだったのですが、今日はひろしまブランドという話がありましたが、世界的に見てかなり瀬戸内ブランドって今認知度が上がってきているのもあって、その海は瀬戸内なのですよ。

しかも空港から近くて、新幹線の駅から数百メートルでその港に行けるといって、非常にこのポテンシャルというのが高いと思っていますので、こういったものをもっと認知度を上げていくという意味でも、これからデジタル技術も含めて取り組んでいきたいと思っていますし、本田さんのデザインの力というのは、今まさに三原に必要な力だと思っています。

三原市民の皆さんは、少し奥ゆかしいところがありまして、いいものを思い切っていると言えないところがあって、それをデザインの力を使って、その良さが伝わっていくということがやっていけたらと思っていますので、いろいろな形でお知恵を借していただきたいと思っています。

私からはざっとこんな形で、またこのあとフリートークがあるということですので、引き続き意見交換をやらせてもらえたらと思います。ありがとうございます。

湯崎知事： ありがとうございます。

それではここから、フリートークにさせていただきますと思いますが、皆さんから他の方の発表などお聞きになられて、何か気が付いた点とか、こんなことがあるのではないかと、御意見があったらシェアしていただければと思います。

あるいはご質問があっても結構だと思いますが、いかがでしょうか、遠慮なしに。

泉さん何かお話されたような感じで、いいですよ本当に何かあったらいかがですか。
泉： ちょっと商店街とは全然関係なくて、西上さんにお聞きしたいのですが、今大人になった方の、例えば不登校であったりとか、なかなか社会になじめない人に対して、DXについて何か考えることとか、気付きとか、もし何かあればありがたいなというところ、西上さんも駅周辺で活動されているというのがあるので、商店街に求めるものとかあったりしますか。

西上： ありがとうございます。

先ほども少しお伝えさせていただいた中では、デジタル比較的強い方もたくさんいらっしゃるって、同じプラットフォームを持って違う多様な動きをするというのは、非常にわくわくする、それこそ作った方々も、このDXを発明した方々もかなりの方々ですので、その人たちが使いやすいということは、その同じような方々も使いやすいのだと思うことがあって、それこそeスポーツがあったり、オンラインで仕事を在宅ワークしたりとか、比較的人に慣れない部分が多いので、個人で楽しむものをとにかくどこかでつながりを求めているので、そのつながり方としては一つはすごくいいなと思っているのです。

片や逆にそっちのほうが苦手だという方もいらっしゃるって、そういった方々が何か取り残されたりとか、先ほどデジタルが新しい問題を生んではいけないという話もあったのですが、そうならないように、何か一緒に解決していくようなこともしなくてはいけないと思いました。

あと商店街というのは、やはりわくわくするのですよね。

別に大型店舗と商店街を比べる必要はないと思うのですが、やはり歩いて行って、

いろいろな専門家、専門家がいて、それぞれにストーリーがあって、物語があって、それが視覚的に高さも変われば色合い違って、年齢もたくさんの方がいらっしゃる。

本当に商店街というのは、多様なものの中の代表的なものかなと思って、海外とか今なかなか行けないでしょうが、行くと市場とかマーケットというのは本当にたくさん刺激を受けて、日常の中に非日常があるというのが、すごくすてきな場所だなと思うので、ぜひそういったところが活性化すると、人々もまた豊かな暮らしもできるかなと思うし、その中で障害を持った方もできたら、まち歩きをしたりだとか、その方に合ったものを一緒に探したりとか、そういうことができるといいかなと思っております。

同じものがたくさんあるというよりも、そういうものがあると逆に暮らしやすいとか、またそこで生産力が上がったりののではないかなと感じております。以上です。

泉： ありがとうございます。

ちょうど二つあって、e スポーツの話がちょっとあったと思うのですが、僕はe スポーツ協会、去年立ち上げたのですが、ちょうど更に先月、社会福祉協議会からイベントをやってくださいと言われていまして、先々週ぐらいにやってきたのですが、そのときに全然行かなかった不登校の子が、e スポーツ大会があるとあった瞬間、いつも親にあっちこっち行けと言われるのに絶対嫌と泣いていたのに、今回に関してはわくわくして、設営から手伝いに来ますとあって、11時からイベントスタートなのに10時から来て、一緒にパソコンを設置するとか、一緒に楽しんでくるといふきっかけになったところがあったので、そういったところでも、この取り残されないといふところの一つかなといふところ、今商店街の在り方も経産局の方が言われていたのですが、商売をやる方だけの集まりではなくて、地域の人たちが交流できる商店街のコミュニティになっていくべきだと、そういう商店街が今後必要とされるといふところがあったので、例えば2階で児童クラブがあると、児童クラブだけだと収益もないし回らないかもしれないけれども、社会的に必要で、その親御さんが下の飲食店で食べるとなると、飲食が盛り上がるというような地域と一体化していくところが、先ほどあったいろいろなお店だけではなくて、そういった活動をしている人たちが、どんどん商店街の中に入っていくといふのも、今の話を聞いて有りなのかなと確かに感じました。

ありがとうございます。

湯崎知事： ありがとうございます。

商店街というのは、ある意味でいって密じゃないですが、集合しているところですよ。

やはりその楽しさといふのも大事で、ぽつんと1軒店みたいなものばかりだと、楽しくも何ともないのだけれども、集まっていると多様なものもおもしろいと、多様な人が集まるとおもしろいといふのも僕は全く同じだと思うのです。

そのときに、それぞれの個性が個性として認められているといふことが、すごく大事なことで、それはお店にしても人にしてもそうだと、仕事もそうですね、いろいろな多様な仕事があって、仕事がいいとか悪いとかないですけども、一部の人が偉そうにしていたりする。

我々もいつも気を付けないといけない部類のほうですが。

それぞれが尊重して、それがまた私たちは地域共生社会につながっていくのではないかと思いますし、17分野といいましたが、いろいろなことにつながっていると感じますね。

ありがとうございます。

他にはいかがでしょうか、どなたか。

梶谷さんお願いします。

梶谷： 本田さんのお話を聞いていたときに、僕も少し思うところがあって、僕も高校を卒業をして大学関東に行って、その後関東で就職して9年くらい向こうで生活をしていて、こっちに帰って来たのですが、やはり向こうにいたときに、「どこの出身なの」、「広島です」、「広島のどこ」、「三原」といふのですが、分からないのですよ。

同じように「尾道の隣です」といふと、皆さん分かるのです。

今言われて空港って三原にあったのだと再認識したところがあって、三原、空港あるのに何かあの場所が三原って思われていないようなところがあるのではないかなと、あそこをもっと三原らしく、難しいかもしれないけれども、なればいいなとちょっと思いました。

本田： ありがとうございます。本当にそうですよね。

三原に空港あるって、ちょっと忘れそうになるぐらい、あまり三原っぽさがないなと思っていて、ちょっと空港から出たら、八天堂が今いろいろとやられている施設とかも結構おもしろいところはあるのですが、空港自体は、そんなに三原感がまだ出ていないというのが結構あるなと思っているので、もう少しそこが三原っぽさを出せるようになればいいのではないかなと、三原市民としては思います。

ありがとうございます。

湯崎知事： すみません。

空港を運営していた者としては反省しきりでございますが、一応、広島空港は広島県全体のものであるので、広島県全体を代表しているということでご容赦いただきたいと思っております。

でも、空港に着陸するときに、私はいつも思うのですが、まず飛行機乗るときは左側に乗りなさいと。

左側に乗ったら、まず着陸するときにずっと芦田川から鞆から見えて、尾道水道がずっと見えて、島が、佐木島から大崎上島とか見えて、段々近づいてくると三原の山がすごく近くに見えるじゃないですか。

緑が深くて、紅葉の季節がすごくきれいなんですね。

だから山も海も楽しめるというのは、まさにこのことかという。

広島空港は、広島市民の皆様から遠いと、よく文句を言われるのですが、でもとてもすてきなところであって、広島を代表する施設ではないかと私は思います。

もっとアピールをするように、今度、民営化されますが、言っておきますので。

というところでですね、実はすみません。

私が今日、時間をいろいろなところで使い過ぎてしまいまして、終わりの時間になってまいりました。

今日もとても有意義な御意見をたくさんいただいたと思います。

そして、やはりこうやってお話していると、問題意識ってすごく共通しているなと思いますし、そういう意味では我々自信のビジョンについても、良かったなと思います。

逆に皆さんも行政が作るビジョンって何か関係ないというか、遠くにあるような気もされるかもしれませんが、実はやはりそれぞれお考えになっているようなことと、つながっているとご理解いただいて、先ほど説明のときにも申し上げましたが、このビジョンを実現していくのは、お一人お一人の県民の皆様のお力、それが集まって実現することだと思いますので、ぜひ、これからも皆さんそれぞれの、欲張りのライフスタイルを追求する中で、一歩前に出て、あるいは少し湖面に小石を投げてさざ波を立てて、社会が、世の中が変わっていくように、一緒に汗をかいていければと思います。

今日は長い時間、本当にありがとうございました。

これからもどうぞよろしく申し上げます。

閉 会

司 会： 皆様、どうもありがとうございました。

それではこれを持ちまして「ひろしまの未来を語る in 三原」を終了いたします。

本日は御協力いただきまして、誠にありがとうございました。